

大林浩 著 『死と永遠の生命 そのキリスト教的理解と歴史的背景』
(四六版、三〇二頁、二〇六〇円 九四年十一月、ヨルダン社刊)
芦名 定道

1

大林浩氏は、『トレルチと現代神学』『アガペーと歴史的な精神』(いずれも日本基督教団出版局)などの著書を通して、歴史主義の立場から神学的課題に取り組むことで知られた神学者である。これら二つの著書が高度な学問的業績であるに対して - 当然本書も学問的に裏付けられたものであるが - 、本書の意図は、「死と永遠の生命」という「各人が、おのが実存の中で神と死に向かい合って考えねばならない」問題について、「筆者の自問を通して得られた一つの手がかりを、苦悶のうちに、自問する人たちにさし向ける手として提供」することにある。その意味で、本書はキリスト教の死生観に関心ある広い読者に向けられている。

2

内容の紹介に先だって、著者の言う歴史主義について簡単に見ておこう。詳細については、本書の後に、『アガペーと歴史的な精神』を精読することをお勧めしたいが、本書の付論、あるいは序論やあとがきなどからも、著者の立場は十分に理解することができる。歴史主義とは、歴史的現実という「共通の地盤」に立脚して、問われるべき事柄の理解を目指す思想的立場を意味しているが、それは次の二つのことを含意している。

「死生観」を含めた人間の意識や文化はその全体が歴史の産物であり、それを理解するにはその歴史的な発展過程の考察が不可欠である。したがって、キリスト教の死生観は、メソポタミア、エジプト、ギリシャ、旧約聖書、ラビ宗教という宗教史の文脈においてはじめて理解可能になる(第一部)。「死と永遠の生命」は、現代という歴史時代を生きる我々自身が自らの死生観を形成する課題として問われねばならない(第二部)。以上のような仕方では、「歴史を超えた事柄をも、できる限り歴史の現実を通して語る」のが、歴史主義なのである。

3

第一部では、キリスト教の歴史的背景として、まず古代メソポタミアとエジプトの死生観が対比され、古代ギリシャ、旧約聖書、ラビ宗教それぞれの死生観が順に概観される(第一、二、三、四章)。内容的には、旧約の神の活動範囲が生命と歴史の領域であり、死後の世界は旧約聖書の主要な関心事ではないこと、個人の復活の思想が比較的新しいものであることの二点に注目したい。

続いて、新約聖書から古代、中世、宗教改革、現代に至るキリスト教の死生観の歴史的展開が辿られる(第五、六章)。第二部の議論の前提として注目すべきポイントは次の二つである。

第一に、キリスト教史を貫く死生観の特徴は、死後生から現生への意識転換にある。具体的に言えば、イエスにおいて「永遠の生命」は主要テーマでなかった、パウロとヨハネ福音書では終末が現在化されている、アウグスティヌスは復活の強調点を未来の終末の出

来事から現時点で起こるべき信仰の現実（第一の復活）へと移した、ルターでは「永遠の生命」が義認信仰において今経験されるべき事柄とされている、そして現代神学において永遠性は現時点での信仰の生の深みにおいて捉えられている（バルトラ）。著者のキリスト教史解釈はキリスト教の死生観の基本線を「現在の生への集中」と見る点で首尾一貫している。

第二に、著者は中世の「煉国」思想が不完全な人間が天国に入れるほどの完全性をいかにして全うするのかという問題の解決のために生み出されたことを確認した上で、その問題点を次のように分析する。煉国での罪の軽減という思想（罪の免罪や功德の思想も含めて）の背後には、中世的世界観（実体概念によって現実を把握する）が存在している。罪や恩寵は実体化（物化）によって、計量化可能なものなる。これが煉国、免罪の前提である。しかし、現代においてはこうした実体的な死生観は関係カテゴリーによって再解釈されねばならない（関係的歴史的存在としての人格の問題として。第二部）。

以上のキリスト教の死生観の分析は優れたものであるが、ここでは二つの疑問点を指摘しておきたい。「現在の生への集中」という基本線を保持した上で、ヨハネ黙示録から千年王国運動に至る終末や復活を宇宙論的規模の未来的待望の事柄として捉えるもう一つの思潮についても、より肯定的な評価があつてしかるべきではないか。現代の錯綜した聖書学の議論に立ち入らず、「福音書に提示された姿のまま、イエスの発言を考えてみたい」との方法論は、確かに本書の性格から見て賢明な選択である。しかし、最近の新約学の動向を考えると、例えば、昨年本誌でも書評されたマックのQ研究のイエス像など、本書の方法論だけで十分であるかは疑問が残る。

4

第二部の問題は、二十世紀を生きる我々現代人が死生観をどのように形成するのかということである。議論の大前提は死は人間にとって回避できない厳粛な現実であるということである。「不死長寿の薬物を追い求めたり、身体的訓練によって死の延期を期待させたりする、無責任な約束を聖書はしない」。そもそも、死とは何であろうか。キリスト教においては、死は自然に根ざす死と人間の罪悪による死の二重性において捉えられる。したがって、死は一方では創造との関係で（第七章）、他方では罪との関係で（第八章）論じられねばならない。罪と結び付いた死の問題は、十字架の赦しにおける解決を要求し（第九章）、この赦しのもとにある生は歴史的な生（第十章）、復活の生（第十一章）、永遠の生命（第十二章）という三つの相において具体的に叙述される。このように練り上げられた構成を有する第二部の内容について、とくに死の二重性の問題を中心に紹介することにした。

著者が創造との関連で死を論じる際の中心は、「死は汲みつくすことのできないほど、深い悲しみをもたらすものである」が、「この最も否定的な役割において、反対に、死は最も肯定的な役割をも果たすのである」という点にある。「死にうる」という現実、人間が無から創造されたこと、そして創造された人格が意味と価値を創造することによって神の創造行為に参与し、神の永遠性につながることを確認するものなのである（死の創造論的意義）。「死ぬということは生きていたことの最も有力な証明である」。これは「意味ある他者」を失った著者自身の経験の深みから語られた洞察である。著者は、

復活と永遠の生命が遠い未来や歴史の彼方の事柄ではなく、むしろ歴史過程において意味を創造する人格性、他者との交わりに関わっている豊かな人生（超越的生）死に向かう生の真の存在理由の発見、愛の人格的具體化であることを繰り返し強調している（第十、十一、十二章）。

しかし、パウロが説くように、死は被造性の問題としてだけでなく、罪の問題として捉える必要がある。著者はこれをユダヤ人問題を事例に「罪 - 死 - 罪」の悪循環として説明する。ユダヤ人問題はキリスト教会の罪を告発する大問題であり、聖書自体のユダヤ人への偏見（ユダヤ民族全体が「キリスト殺し」として断罪されるべきだ）に起因している。この偏見は古代教父から中世、宗教改革、そして現代までのキリスト教史を貫くキリスト教会の罪である。日本人のユダヤ人観もこの歴史と無関係ではない（「マルコポーロ」廃刊事件！）。この罪はおびただしいユダヤ人の死を生み出した - 「大量虐殺」という用語で整理し去ることさえできない - 。ところが、不幸なことにこのユダヤ人の死と苦難は、他者への愛や寛容ではなく、ユダヤ人によるパレスチナ人の非人道的扱いを生み出すこととなった。死と苦難は新たな罪を拡大再生産するのである。死が第一人称の次元（「私」や「我々」の苦難というエゴイズム）に留まる限り、それは復讐心しか養わない - 敗戦より五十年を迎える日本はどうであろうか - 。ここに「罪 - 死 - 罪」の悪循環の現実がある。問題は、この悪循環をいかにして断ち切って、愛へ転換するのかということであり、十字架の赦しと復活はまさにこの問題連関において理解されねばならない。

5

死と生を論じた浅薄な書物が氾濫する中で、本書は死生観をキリスト教の原点から、そして我々自身の生きる現場で再考する良い機会を与えてくれる。復活や天国といった事柄はキリスト教会内でも多くの誤解を生じがちな問題であり、本書はこの誤解を解くにも有益であろう。